

幼児の謝罪行動に加害者の意図や被害の大きさが及ぼす影響

中澤 潤¹⁾ 中道圭人²⁾ 小松谷佳代子³⁾ 宮田寛子⁴⁾

¹⁾千葉大学・教育学部 ²⁾東京学芸大学連合大学院教育学研究科・博士課程

³⁾大網白里町立大網幼稚園 ⁴⁾船橋市私立清和幼稚園

Effect of intentionality and severity of harm on young children's apology

NAKAZAWA Jun¹⁾ NAKAMICHI Keito²⁾ KOMATSUYA Kayoko³⁾ MIYATA Hiroko⁴⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

²⁾Doctoral Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University, Japan

³⁾Oamishirasato Kindergarten ⁴⁾Seiwa Kindergarten

本研究は、加害者の意図や与えた被害の大きさの違いによる幼児の謝罪の使い分けを検討した。実験1では3-6歳児 ($N=61$) を対象に、加害者の意図の違い (故意・反撃・偶発) による謝罪 (真の謝罪・道具的謝罪・ルーティンとしての謝罪) の使い分けを検討した。その結果、全般的に幼児はルーティンとしての謝罪を行うが、5-6歳頃から徐々に真の謝罪を行えるようになること、また加害者の意図の違いによって謝罪を使い分けないことが明らかとなった。実験2では5-6歳児 ($N=34$) を対象に、被害者に与えた被害の大きさ (小・大) が謝罪の使い分けや謝罪の際の心的状態 (罪悪感・責任の受容・相手の怒りの認識・許容欲求) に及ぼす影響を検討した。その結果、被害の小さい場合より大きい場合に謝罪の生起量が多いことや、ルーティンとしての謝罪より真の謝罪を行う場合に罪悪感等を抱きやすいことが明らかとなった。

This study examined the effects of intentionality and severity of harm on young children's apology. Ex. 1 ($N=39$) showed that though 3- and 4-year olds apologize as a routine, they become to do sincere apology from 5- to 6-year old. However, young children didn't consider the assailant's intention on their apologies. Ex. 2 ($N=34$) showed the apology increases with severity of harm, and the sincere apology evoked feeling of guilt more than the routinized apology.

キーワード：幼児 (young children) 真の謝罪 (sincere apology) 道具的な謝罪 (instrumental apology)
ルーティン (routine)

問題・目的

人が他者に対して何らかの被害を及ぼすような対人場面において、謝罪は加害者が最も頻繁に用いる方略である (Gonzales, Pederson, Manning, & Wetter, 1990)。謝罪行動は被害者との人間関係を修復する行為 (熊谷, 1993) であり、幼児の対人場面においても見られる。例えば、松永 (1993) は保育園での観察を通して、1歳半頃から行為による謝罪 (例：被害を与えた相手の頭を撫でる)、2歳頃から言語による謝罪 (例：ごめんね)、3歳半頃になると子ども同士のやり取りの中での自発的な謝罪が見られることを示している。さらに、幼児はこの謝罪を相手によって使い分けている。例えば、謝罪の種類には“真の謝罪” (責任を受容し、罪悪感を認識した上で行われる謝罪) と“道具的謝罪” (保育者からの罰の回避のように、何らかの目的を達成するために行われる謝罪) の2つがある (中川, 2003; 中川・山崎, 2004, 2005)。中川・山崎 (2004) は4-6歳児を対象に、加害者と被害者の親密性の高低がモノの取り合い場面 (加

害者が被害者の玩具を奪い取る) での加害者の謝罪行動に及ぼす影響を検討した。その結果、4歳児よりも6歳児で謝罪の生起率が高いこと、4歳児は親密性の高い相手にも道具的謝罪を用い、6歳児は親密性の低い相手には道具的謝罪を、高い相手には真の謝罪を用いることが明らかとなった。この結果から、中川・山崎 (2004) は6歳頃頃から相手との親密性の違いによって謝罪を使い分けるようになることと結論付けている。

この中川・山崎 (2004) では謝罪のタイプとして真の謝罪と道具的謝罪を取り上げている。しかし、幼児にとっての謝罪は、自己の責任や罪悪感、あるいは保育者からの罰などを意識したものではなく、より単純なものである可能性がある。例えば、中川 (2003) は幼稚園での観察から、幼児期の時点ですでに謝罪-許容スクリプト (加害者は被害者に謝罪しなければならず、謝罪を受けた被害者は加害者を許容しなければならない: Darby & Schlenker, 1989) が確立されていることを明らかにしている。つまり、幼児にとっての謝罪は、悪いことをしたらとりあえず“ごめんね”と言う、そして“ごめんね”と言われたら“いいよ”と言うといった、単純なルーティンである可能性がある。そこで本研究では、中川・

山崎（2004，2005）での真の謝罪・道具的謝罪に“ルーティンとしての謝罪”を加え、幼児の謝罪の使い分けについて検討する。

次に謝罪行動に影響を及ぼす要因に関して、従来の研究では謝罪の仕方の違い、加害者側の意図や与えた被害の大きさが加害者・被害者の様々な認識に及ぼす影響を検討してきた（Darby & Schlenker, 1982, 1989; Fukuno & Ohbuchi, 1998; Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989; Ohbuchi & Sato, 1994; Schlenker & Darby, 1981）。例えば、幼児や1・2年生では加害者の謝罪の仕方（例：おごりな謝罪・言い訳混じりの謝罪・補償を申し出る謝罪・真の謝罪）によって加害者の罪悪感（例：どれくらい悪いと感じているか）や許容される程度（例：どれくらい許されるか）の評価に違いはないが、4・5年生頃になると加害者が補償を申し出る謝罪や真の謝罪を行う場合に加害者の罪悪感や許容度を最も高く評価することが示されている（Darby & Schlenker, 1982; Ohbuchi & Sato, 1994）。また、小学生や成人では意図的に被害を与えた場合は非意図的な場合よりも真の謝罪が必要であり（Ohbuchi & Sato, 1994）、被害が大きい場合は小さい場合よりも被害者の攻撃的感情（例：怒り）が大きいと評価することが示されている（Ohbuchi et al., 1989; Fukuno & Ohbuchi, 1998）。

では、小学生や成人と同様、幼児は加害者の意図や与えた被害の大きさを考慮し、謝罪を使い分けができるのだろうか。前述の中川・山崎（2004，2005）では、モノの取り合いといった加害者が意図的に被害を与える

場面（故意場面）のみで謝罪行動を検討していた。意図的ではあるが相手の違反に対する反撃として被害を与えた場面（反撃場面）や、意図的でなく偶然に被害を与えてしまった場面（偶発場面）では、幼児はどのような謝罪を行うのだろうか。そこで実験1では、加害者の意図の異なる場面（故意・反撃・偶発）における謝罪（ルーティンとしての謝罪・道具的謝罪・真の謝罪）の使い分けを検討することとした。

実験 1

【方 法】

参 加 児

千葉市内の幼稚園・保育所に通う年少児21名（男児10名，女児11名： $M = 4:1$ ，範囲＝3:7—4:7），年中児21名（男児11名，女児10名： $M = 5:1$ ，範囲＝4:7—5:7），年長児21名（男児11名，女児10名： $M = 6:1$ ，範囲＝5:8—6:6）の合計63名。

材 料

課題で使用する紙芝居（3パターン）を男女1組ずつ、合計6組（図1）。罪悪感の程度を表す表情カード4枚（図2）。謝罪理由を表した絵5枚（ルーティンとしての謝罪3枚，道具的謝罪1枚，真の謝罪1枚）を男女1組ずつ、合計10枚（図3）。

手続き・課題

個別面接法で行った。はじめに氏名・年齢を尋ねた後、ラポールを形成した。ラポール形成後、参加児に罪悪感

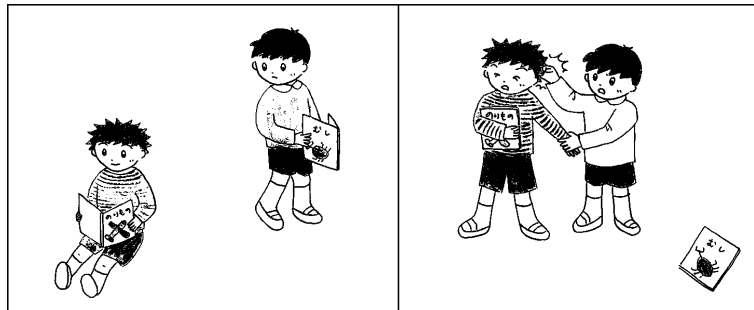


図1 課題で使用する紙芝居の例（故意場面で使用）

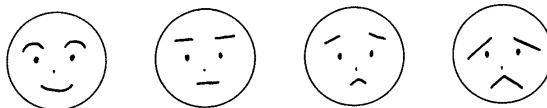


図2 罪悪感の程度を示す表情カード



図3 謝罪理由を示した絵の例
（左はルーティンとしての謝罪，中央は道具的謝罪，右は真の謝罪）

表1 実験1での各場面の話

故意場面	〇〇(参加児の名前)君/ちゃんとB(クラスのお友達)が絵本を読んでいます。でも、読んでいる途中で〇〇君/ちゃんはBが読んでいる絵本が面白そうだなと思って、むりやりBから絵本をとろうとしました。でも、Bがなかなか絵本を渡さなかったの、〇〇君/ちゃんはBのことを叩いてしまいました。
反撃場面	〇〇(参加児の名前)君/ちゃんはブランコに乗ろうと順番を待ってました。ちょうどブランコが空いて〇〇君/ちゃんの番がきたとき、横にいたC(クラスの友達)が突然割り込んで来て、ちゃんと並んでいた〇〇君/ちゃんよりも先にブランコに乗ろうとしました。それに怒った〇〇君/ちゃんは、ついCのことを叩いてしまいました。
偶発場面	〇〇(参加児の名前)君/ちゃんとD(クラスの友達)は砂場で遊んでいました。大きな山を作ろうとせっせと砂を積み重ねています。途中で〇〇君/ちゃんはもっと大きなスコップが欲しくなったので取りに行こうと思い、立ち上がりました。その時、〇〇君/ちゃんの持っていたスコップが隣にいたDの頭にコツンと当たってしまいました。

を示す表情の絵を4枚提示し、その中から罪悪感の程度が大きいと思う順にカードを選択させた。次に、実験者が参加児の選択した順にカードを並べ、参加児に順序の確認をした。続いて、参加児に3つの紙芝居を聞いてもらうこと、紙芝居の後に質問を尋ねること、紙芝居に登場する主人公は参加児自身、他の登場人物はクラスの同性の友達であることを説明した。その後、課題を実施した。

課題では3つの場面が設定された：故意場面、反撃場面、偶発場面。参加児は3つの場面すべてで課題を行った。場面の提示順序はランダムにされた。各場面での話を表1に示す。

実験者は紙芝居(図1)を用いながら、参加児に各場面の話(表1)を聞かせた。その後、「この時、〇〇君/ちゃんは、△△(各場面での友達の名前)に悪いことをしたかなって思うかな、それとも思わないかな？それはどれくらいかな？(罪悪感質問)」と尋ね、表情カードの中から1枚選択させた。選択後、「この後、〇〇君/ちゃんはどうするかな？(謝罪の有無質問)」と尋ねた。参加児が「謝る」「謝らない」以外の反応、あるいは「分からない」という反応をした場合、「〇〇君/ちゃんは△△に謝ったりするかな？」と再度、尋ねた。参加児が自発的に、あるいは実験者の再度の問いかけに対して「謝る」と反応した場合、「〇〇君/ちゃんは△△にどうして謝るのかな？(図3の絵それぞれを提示しながら)謝らないと後で先生に怒られちゃうから謝るのかな(道具的謝罪)？お友達に悪いことしちゃったなあって思ったから謝るのかな(真の謝罪)？ごめんねって言ったら、お友達にいいよって言ってもらえるから謝るのかな(ルーティンとしての謝罪)？(謝罪理由質問)」と理由を尋ねた。参加児が「謝らない」と反応した場合、そのまま次の課題に移った。参加児のすべての反応は実験者によって記録用紙に記録された。

課題は、各場面に沿った話(表1)に変わることで、各場面での友達の名前が変わることを除いて、すべて同様の手続きで行った。

[結 果]

年齢・場面による罪悪感の程度

罪悪感質問に関して、“一番悪いことをしたと思っ

表2 罪悪感質問の平均得点(括弧内は標準偏差)

	謝罪行動課題(罪悪感の程度)			
	故意場面	反撃場面	偶発場面	合計
年少児 (<i>n</i> =21)	3.00 (1.14)	2.57 (1.29)	2.81 (1.29)	2.79 (0.97)
年中児 (<i>n</i> =21)	3.24 (1.00)	3.24 (0.89)	2.95 (1.16)	3.14 (0.68)
年長児 (<i>n</i> =21)	3.71 (0.56)	3.10 (1.00)	3.24 (0.77)	3.35 (0.52)
合計 (<i>N</i> =63)	3.32 (0.96)	2.97 (1.10)	3.00 (1.09)	3.10 (0.77)

4点満点。

いる表情”～“一番悪いことをしたと思ってない表情”の順に、4点～1点を与えた。各学年の罪悪感質問での平均得点と標準偏差を表2に示す。年齢や場面による罪悪感の程度の違いを検討するために、年齢(3：年少・年中・年長)×場面(3：故意・反撃・偶発)の繰り返しのある分散分析を行った(被験者間要因：年齢、被験者内要因：場面)。その結果、年齢の主効果($F(2, 60) = 2.97, p < .10$)と場面の主効果($F(2, 120) = 3.05, p < .10$)はいずれも有意な傾向であったが、年齢×場面の交互作用は有意でなかった。年齢の主効果に関しては年少児から年長児につれより罪悪感が高くなっており、Tukey HSD法による多重比較では、年少児よりも年長児で得点が高かった($p < .05$)。場面の主効果に関して、各場面間での t 検定を行ったところ、故意場面と反撃場面($t(62) = 2.53, p < .05$)、故意場面と偶発場面($t(62) = 1.97, p < .10$)で有意な差が見られ、いずれも故意場面の罪悪感が高かった。反撃場面と偶発場面の間に差はなかった。

自発的な謝罪の生起頻度

謝罪の有無質問での参加児の反応に関して、自発的に“謝る”と反応した場合を「自発的謝罪」、それ以外の反応をした場合を「その他」に分類した。年齢・場面別の参加児の反応の頻度と割合を表3に示す。年齢による自発的な謝罪の頻度の違いを検討するため、全場面をこみにして年齢(3：年少・年中・年長)×謝罪(2：自発的謝罪・その他)の χ^2 検定を行った。その結果、有

表3 自発的謝罪の頻度（括弧内は年齢・場面毎の各カテゴリーの割合）

	故意場面		反撃場面		偶発場面		場面合計	
	自発的謝罪	その他	自発的謝罪	その他	自発的謝罪	その他	自発的謝罪	その他
年少児	11 (52.4)	10 (47.6)	11 (52.4)	10 (47.6)	11 (52.4)	10 (47.6)	33 (52.4)	30 (47.6)
年中児	14 (66.7)	7 (33.3)	12 (57.1)	9 (42.9)	17 (81.0)	4 (19.0)	43 (68.3)	20 (31.7)
年長児	14 (66.7)	7 (33.3)	13 (61.9)	8 (38.1)	17 (81.0)	4 (19.0)	44 (69.8)	19 (30.2)
合計	39 (61.9)	24 (38.1)	36 (57.1)	27 (42.9)	45 (71.4)	18 (28.6)	120 (63.5)	69 (36.5)

意な傾向の差が見られ ($\chi^2(2, N=189)=5.10, p<.10$), 残差分析によると, 年少児は年中児・年長児よりも「自発的謝罪」が少なく, 「その他」が多かった。次に, 場面による謝罪生起頻度の違いを検討するため, 全年齢をこみにしてCochranのQ検定を行った。その結果, 有意な差は見られず, 場面による謝罪生起頻度の違いはなかった。

謝罪理由の選択

年齢・場面別の各謝罪理由の頻度と割合をそれぞれ表4, 表5に示す。まず謝罪理由(3:ルーティンとしての謝罪・道具的謝罪・真の謝罪)に関して, 年齢・場面をこみにして χ^2 検定を行ったところ, 有意な差が見られ ($\chi^2(2, N=180)=51.10, p<.01$), 「ルーティン」が多く, 「道具的謝罪」が少なかった。次に, 年齢による謝罪理由の違いを検討するため, 年齢(3:年少・年中・年長)×謝罪理由(3)の χ^2 検定を行った。その結果,

有意な差が見られ ($\chi^2(4, N=180)=11.93, p<.05$), 残差分析によると, 年少児では年長児より「真の謝罪」が少なく, 「ルーティン」が多かった。さらに, 場面による謝罪理由の違いを検討するために, 場面(3:故意・反撃・偶発)×謝罪理由(3)の χ^2 検定を行ったところ, 有意な差は見られなかった。

【考 察】

実験1では, 加害者の意図の違い(故意・反撃・偶発)による謝罪(ルーティンとしての謝罪・道具的謝罪・真の謝罪)の使い分けを検討した。まず罪悪感の程度に関して, 年少児(2.79点)よりも年長児(3.35点)で得点が高かった。年齢発達にともない, 相手に被害を与えてしまったことに対して罪の意識を持つようになるといえる。また, 反撃場面(2.97点)や偶発場面(3.00点)よりも故意場面(3.32点)において罪悪感得点が高かった。故意場面では, 意図的に被害を与えた加害者の責任が明確である一方で, 反撃場面や偶発場面では加害者のみに非があるわけでない。幼児であってもこのような場面による違いを理解していると考えられる。

次に, 年少児(52.4%)は年中児(68.3%)・年長児(69.8%)よりも自発的な謝罪の生起量が少なかった(括弧内は生起率)。この結果は, 中川・山崎(2004)の結果とも一致している。年中・年長児より少ないとはいえ, 年少児の5割以上が自発的に謝罪すると判断していることを踏まえると, 年少児であっても対人葛藤を解決するために自発的に謝罪を行い, 年齢発達に伴い, その頻度が多くなるといえる。また, 場面による自発的な謝罪の生起量に違いはなかった。この点に関しては, 次の謝罪理由の選択とともに考察する。

謝罪理由の選択に関して, 全体的にルーティンとしての謝罪が多く, 道具的謝罪が少なかった。幼児は自己の責任や他者からの罰を意識して謝罪を行うというより, “相手に被害を与えたら謝らなければならない”というルーティンとして謝罪を行っているようである。さらに, 謝罪理由には発達の違いがあり, 真の謝罪の選択は年少児で少なく, 年長児で多かった。Tavuchis(1991)によれば, 真の謝罪には罪悪感の認識と責任の受容が必要とされる。中川・山崎(2005)は, 6歳児が罪悪感の認識や責任の受容といった真の謝罪の必要条件を満たしており, 5歳児であっても被害者の感情状態を推測させる条件下であれば, それらの必要条件が満たされることを示している。本研究の結果や中川・山崎(2005)を踏

表4 年齢別の各謝罪理由の頻度
(括弧内は年齢別の割合)

	ルーティンとしての謝罪	道具的謝罪	真の謝罪
年少児	39 (68.4)	11 (19.3)	7 (12.3)
年中児	38 (61.3)	7 (11.3)	17 (27.4)
年長児	27 (44.3)	11 (18.0)	23 (37.7)
合計	104 (57.8)	29 (16.1)	47 (26.1)

表5 場面別の各謝罪理由の頻度
(括弧内は場面別の割合)

	ルーティンとしての謝罪	道具的謝罪	真の謝罪
故意場面	40 (64.5)	10 (16.1)	12 (19.4)
反撃場面	32 (55.2)	8 (13.8)	18 (31.0)
偶発場面	32 (53.3)	11 (18.3)	17 (28.3)
合計	104 (57.8)	29 (16.1)	47 (26.1)

まえると、幼児は全般的にルーティンとして謝罪を行っているものの、5-6歳頃になると、徐々に自己の責任を意識して、真の謝罪を行えるようになってくるといえる。

しかしながら、自発的な謝罪の生起量と同様、謝罪理由の選択に関しても場面による違いは見られなかった。つまり、幼児は加害者の意図の違いにより謝罪行動を使い分けていなかった。では、幼児は加害者の意図をまったく考慮していないのであろうか。罪悪感の程度では場面による違いが見られたことから、幼児はある程度、場面による意図の違いを考慮していると考えられる。しかし、幼児は意図の違いを認識しているものの、その違いによって方略を使い分けるという段階には至っていないのかもしれない。

実験 2

実験1の結果から、幼児は加害者の意図の違いによって謝罪を使い分けていないことが明らかとなった。加害者の意図以外に謝罪に影響を与える要因としては、被害者に与えた被害の大きさがある (Ohbuchi et al., 1989; Fukuno & Ohbuchi, 1998)。与えた被害の大きさの違いによって、幼児は謝罪を使い分けることができるだろうか。そこで実験2では、被害者に与えた被害の大きさ(小・大)が謝罪の使い分けに及ぼす影響を検討する。

この与えた被害の大きさに関して、Piaget (1930) は、7歳以下の子どもが加害者の意図に関係なく、被害の小さい場合より大きい場合に加害者をより悪いと判断することを明らかにしている。しかし実験1では、反撃場面・偶発場面より故意場面で罪悪感の程度が最も高く、幼児も意図を考慮した判断をしていた。そこで実験2では、被害の大きさ(小・大)に加害者の意図の有無(故意・偶発)を加えた4つの場面における謝罪の使い分けを検討することとした。

さらに、実験2では謝罪の際の心的状態を検討する。前述のように、真の謝罪には罪悪感の認識と責任の受容が必要とされる (Tavuchis, 1991)。実験1や中川・山崎 (2005) の結果から、年長児であればある程度、真の謝罪の必要条件を満たしているようである。また、中川 (2003) は実験の結果から、年長児の謝罪行動が「責任の受容→被害者の怒りの認識→被害者から許容されたいという欲求(許容欲求)→謝罪」という一連の流れから生起することを示唆している。これらの研究を踏まえると、幼児が真の謝罪を行う際には、“罪悪感の認識”“責任の受容”“被害者の怒りの認識”“許容欲求”の4つの心的状態を持つ一方で、ルーティンとしての謝罪を行う際にはそれらの心的状態を持たない可能性がある。この点について検討するため、実験2ではルーティンとしての謝罪・真の謝罪それぞれを選択した幼児の4つの心的状態(罪悪感の認識・責任の受容・怒りの認識・許容欲求)の違いを検討することとした。また、謝罪の際にこれらの心的状態をある程度持つと考えられる年長児を対象とした。

〔方 法〕

参加児

千葉市内の幼稚園・保育所に通う年長児34名(男児20名、女児14名： $M = 6:0$ 、範囲 = $5:7 - 6:6$)。

材 料

課題で使用する紙芝居(4パターン)を男女1組ずつ、合計8組。ルーティンとしての謝罪を表す絵1枚、真の謝罪を表す絵1枚を男女1組ずつ、合計4枚。大、中、小の丸が並べて描かれた程度測定図版。

手続き・課題

個別面接法で行った。はじめに、参加児の氏名・年齢等を尋ねた後、ラポールを形成した。続いて、参加児に紙芝居の話聞いてもらうこと、紙芝居の後で質問を尋ねること、紙芝居に登場する主人公は参加児自身、他の登場人物はクラスの同性の友達であることを説明した。その後、課題を実施した。

課題は、話の主人公(参加児自身)が他の友達に被害を与える場面を提示し、その場面での謝罪の有無、謝罪理由、罪悪感の程度、相手の怒りの程度、責任の受容の程度、許容欲求の程度を尋ねるものである。課題は主人公の意図の有無(故意・偶発)×友達の被害の大きさ(大・小)の4パターンあり、参加児は4パターンすべてに回答した。各課題での話を表6に示す。課題の提示順序は、参加児の半数が故意⇒偶発、残りが逆の順序で提示され、被害の大きさに関してはランダムになるように提示された。

それぞれの課題において、実験者は参加児に紙芝居を提示しながら、話を聞かせた。話の後、以下の質問を順に尋ねた。1つ目は、謝罪の有無質問(〇〇君／ちゃんはお友達に『ごめんね』って言うかな、言わないかな?)を尋ねた。この質問に対して“ごめんねと言う”と反応した参加児には、さらに謝罪理由質問を尋ねた(どうして、『ごめんね』って言うのかな?(それぞれの謝罪に対応する絵を提示しながら)お友達に悪いことしちゃったなあって思うから謝るのかな(真の謝罪)?『ごめんね』って言ったらお友達に『いいよ』って言ってもらえるから謝るのかな(ルーティンとしての謝罪)?)。“ごめんねと言う”以外の反応をした参加児(34名中1名)はそこで課題を終了し、分析から除外された。次に、罪悪感質問(〇〇君／ちゃんはお友達に悪いことしたと思うかな、思わないかな?)を尋ねた。この質問に“悪いことしたと思う”と反応した参加児には、さらに「どれくらい悪いことしたと思うかな?(程度測定図版の小さい丸を指しながら)これが『少し思う』、(中ぐらいの丸を指しながら)これが『まあまあ思う』、(大きな丸を指しながら)これが『すごく思う』だったら、〇〇君／ちゃんはこの3つの中のどれかな?」と尋ねた。罪悪感質問の後、「〇〇君／ちゃんはお友達は怒っていると思うかな、思わないかな?(怒りの認識質問)」と尋ね、「怒っている」と反応した参加児には、罪悪感質問と同様の手続きで友達の怒りの程度を示してもらった。“怒っている”以外の反応をした参加児には、そのまま次の質問に移った。怒りの認識質問の後、「お友達が怒っているとしたら、〇〇君／ちゃんは自分のせいだと思うかな、思わないかな?(責任受容質問)」と尋ね、「自分のせいだ

表6 実験2での各課題の話

意図	被害	
故意	小	〇〇君/ちゃん(参加児)がお部屋の中で遊んでいると、クラスのお友達が積み木のおうちを一生懸命作っていました。面白そうだった〇〇君/ちゃんは積み木のおうちを作り始めました。でも積み木が足りなくて、大きなおうちが作れません。すると、〇〇君/ちゃんはわざとお友達のおうちを壊しました。おうちは少しだけ崩れました。
	大	〇〇君/ちゃん(参加児)がお部屋の中で遊んでいると、クラスのお友達が積み木のおうちを一生懸命作っていました。面白そうだった〇〇君/ちゃんは積み木のおうちを作り始めました。でも積み木が足りなくて、大きなおうちが作れません。すると、〇〇君/ちゃんはわざとお友達のおうちを壊しました。おうちはぐしゃぐしゃになってしまいました。
偶発	小	〇〇君/ちゃん(参加児)は砂場で遊ぼうと思い、砂場にやってきました。すると、クラスのお友達が大きな砂のお山とトンネルを一生懸命作っていました。面白そうだった〇〇君/ちゃんはお友達の方に近づいて行きました。すると、〇〇君/ちゃんは石につまづいて転んでお山を壊してしまいました。お山は少しだけ崩れました。
	大	〇〇君/ちゃん(参加児)は砂場で遊ぼうと思い、砂場にやってきました。すると、クラスのお友達が大きな砂のお山とトンネルを一生懸命作っていました。面白そうだった〇〇君/ちゃんはお友達の方に近づいて行きました。すると、〇〇君/ちゃんは石につまづいて転んでお山を壊してしまいました。お山はぐしゃぐしゃになってしまいました。

と思う”と反応した参加児には、罪悪感質問と同様の手続きで責任の程度を示してもらった。最後に「〇〇君/ちゃんはお友達に許して欲しいかな、欲しくないかな? (許容欲求質問)」と尋ね、「許して欲しい」と反応した参加児には、罪悪感質問と同様の手続きで許容欲求の程度を示してもらった。「許して欲しい」以外の反応をした参加児には、そのまま次の課題へ移った。

各課題における参加児のすべての反応は、実験者によって記録用紙に記録された。また、意図の有無の異なる話に移るときは「今度はさっきと違う話だから、よく気をつけて聞いていてね」と、被害の大きさの違う話に移るときは「今度は最後が少しだけ違うから気をつけてよく聞いていてね」と教示し、参加児の注意を促した。

得点化

罪悪感質問、怒りの予測質問、責任受容質問、許容欲求質問において、大きな丸・中ぐらいの丸・小さな丸を選択した場合にそれぞれ3～1点を与え、それ以外の場合(例：悪いことをしたと思わない)に0点を与えた。

【結 果】

各場面での謝罪の使い分け

各場面で選択された謝罪の頻度と割合を表7に示す。条件による謝罪の選択の違いを検討するため、CochranのQ検定を行った。その結果、有意な差のある傾向が見られ($Q(3)=6.35$, $p<.10$)、故意・被害大場面で最も真の謝罪の選択が多く(48.5%)、次いで偶発・被害大場面(42.4%)、偶発・被害小場面(33.3%)で、故意・被害小場面で最も選択が少なかった(30.3%)。

謝罪の種類による罪悪感・怒りの認識・責任受容・許容欲求の違い

場面・謝罪の種類別の各質問の平均得点と標準偏差を

表7 場面別の各謝罪理由の頻度(括弧内は場面別の割合)

	故意			偶発		
	被害小	被害大		被害小	被害大	
ルーティンとしての謝罪	23 (69.7)	17 (51.5)		22 (66.7)	19 (57.6)	
真の謝罪	10 (30.3)	16 (48.5)		11 (33.3)	14 (42.4)	

表8 場面別の罪悪感・怒りの認識・責任受容・許容欲求の平均(括弧内は標準偏差)

	故意							偶発						
	被害小			被害大			故意 場面 合計	被害小			被害大			偶発 場面 合計
	ルー ティン	真の 謝罪	合計	ルー ティン	真の 謝罪	合計		ルー ティン	真の 謝罪	合計	ルー ティン	真の 謝罪	合計	
罪悪感	1.70 (1.11)	2.50 (0.71)	1.94 (1.06)	1.76 (1.15)	2.50 (0.63)	2.12 (0.99)	2.03 (0.82)	1.82 (1.00)	2.45 (0.69)	2.03 (0.95)	2.26 (0.87)	2.43 (0.64)	2.33 (0.78)	2.18 (0.69)
怒りの 認識	1.26 (1.25)	2.40 (0.97)	1.61 (1.27)	1.65 (1.27)	2.25 (1.18)	1.94 (1.25)	1.77 (1.17)	1.14 (1.08)	1.91 (1.04)	1.39 (1.11)	1.58 (1.17)	1.29 (1.14)	1.45 (1.15)	1.42 (0.90)
責任 受容	1.74 (1.14)	2.30 (0.48)	1.91 (1.01)	1.82 (1.29)	2.38 (0.50)	2.09 (1.01)	2.00 (0.92)	1.91 (1.09)	1.91 (0.83)	1.91 (1.07)	2.05 (0.91)	2.57 (0.65)	2.27 (0.84)	2.09 (0.85)
許容 欲求	2.52 (0.73)	2.10 (0.74)	2.39 (0.75)	2.53 (0.72)	2.31 (0.79)	2.42 (0.75)	2.41 (0.62)	2.18 (0.80)	2.55 (0.69)	2.30 (0.77)	2.26 (0.87)	2.07 (0.73)	2.18 (0.81)	2.24 (0.65)

3点満点。

表8に示す。まず、ルーティンとしての謝罪と真の謝罪の罪悪感の違いを検討するため、場面別にそれぞれの謝罪の罪悪感得点に関して t 検定を行った。その結果、故意・被害小場面 ($t(31)=2.11, p<.05$)、故意・被害大場面 ($t(25)=2.30, p<.05$)、偶発・被害小場面 ($t(31)=1.88, p<.10$)で差が見られ、いずれもルーティンとしての謝罪より真の謝罪を選択した参加児で得点が高かった。偶発・被害大場面では有意な差は見られなかった。

次に、怒りの認識質問に関して、場面別にルーティンとしての謝罪・真の謝罪の得点差を検討した。その結果、故意・被害小場面 ($t(22)=2.84, p<.05$)、偶発・被害小場面 ($t(31)=1.96, p<.10$)で差が見られ、いずれも真の謝罪を選択した参加児の得点が高かった。故意・被害大場面、偶発・被害大場面では有意な差は見られなかった。

責任受容質問に関して、場面別にルーティンとしての謝罪・真の謝罪の得点差を検討したところ、故意・被害小場面 ($t(31)=1.99, p<.10$)、偶発・被害大場面 ($t(31)=1.82, p<.10$)で差が見られ、いずれも真の謝罪を選択した参加児の得点が高かった。故意・被害大場面、偶発・被害小場面では有意な差は見られなかった。

許容欲求質問に関しても同様に t 検定を行ったが、いずれの場面においても有意な差は見られなかった。

[考 察]

実験2では、被害の大きさ(小・大)×加害者の意図の有無(故意・偶発)という4つの場面における謝罪の使い分けや、その謝罪の際の心的状態について検討した。まず、全体的に真の謝罪(38.6%)よりもルーティンとしての謝罪(61.4%)が多かった(括弧内は出現率)。この結果は実験1と同様であり、年長児であってもルーティンとしての謝罪を多く行っているといえる。また、実験2では場面による謝罪の使い分けが見られ、故意・被害大場面でも真の謝罪が多く(48.5%)、次いで偶発・被害大場面(42.4%)、偶発・被害小場面(33.3%)で、故意・被害小場面でも最少なかった(30.3%)。故意場面であっても与えた被害の小さい場合は真の謝罪生起率が低いことから、年長児は意図より被害の大きさを判断材料として謝罪を使い分けしているようである。これは、7歳以下の子どもは意図に関係なく、被害の大きさと善悪の判断を行うというPiaget(1930)の見解とも一致する。

次に、ルーティンとしての謝罪・真の謝罪それぞれにおける4つの心的状態の違いについて考察する。罪悪感、怒りの認識、責任の受容に関して、場面による違いはあるものの、全般的にルーティンとしての謝罪より真の謝罪を選択した場合に得点が高かった。Tavuchis(1991)は罪悪感の認識と責任の受容を真の謝罪の必要条件とし、中川・山崎(2005)は6歳児がこの必要条件を満たしていることを示した。中川・山崎(2005)と同様、実験2の結果は年長児が真の謝罪の必要条件を満たしている可能性を示しているといえる。また、中川(2003)は「責任の受容→被害者の怒りの認識→被害者から許容されたい」という欲求(許容欲求)→謝罪」という一連の流れに

よって謝罪が生起するとしていた。真の謝罪において罪悪感、怒りの認識、責任受容それぞれの得点が高いという結果は、真の謝罪を行う際には中川(2003)の述べるような一連の心的状態を持つ可能性を支持している。

しかし、許容欲求に関してはルーティンとしての謝罪と真の謝罪の差は見られず、いずれの謝罪においても許容欲求の得点が高かった(ルーティンとしての謝罪の平均点=2.37:真の謝罪での平均点=2.26)。どのような謝罪であれ、謝罪を行うこと自体が「相手に許して欲しい」ということの表れであるため、いずれの謝罪でも許容欲求が高かったのかもしれない。そう考えると、幼児の謝罪は「許容欲求→謝罪」という単純な流れによって生起している可能性もある。今後の研究では、謝罪の際の心的状態をさらに検討することも興味深いであろう。

全体的考察

本研究では、加害者の意図や被害の大きさの違いによる幼児の謝罪の使い分けを検討した。全体的に、幼児はルーティンとしての謝罪を用いることが多かった。つまり、幼児期には謝罪-許容スクリプト(Darby & Schlenker, 1989)のように単純なルーティンとして謝罪を行っているといえる。しかし、年長児の5割弱は真の謝罪を行っていた。この謝罪は相手に対して罪悪感を抱き、被害を与えたことの責任を受容した上でのものであり、Tavuchis(1991)が述べる真の謝罪の必要条件を満たしていた。幼児はまず単純なルーティンとして謝罪することを学び、その後の発達に伴い、徐々に真の謝罪を行えるようになっていくのであろう。

また、幼児は加害者の意図の違いによって謝罪を使い分けなかったが、与えた被害の大きさによって謝罪を使い分けることができた。幼児の謝罪行動には、被害の大きさのような直接的な要因が大きく関わっているようである。中川・山崎(2004)は相手との親密性が謝罪行動に及ぼす影響を示している。今後、意図や被害の大きさ、相手との親密性以外の要因(例:相手が年上・同年生・年下といったような社会的な地位の違い)が謝罪行動に及ぼす影響を検討する必要もあるだろう。

付 記

本論文は小松谷佳代子(2003)、宮田寛子(2005)の千葉大学教育学部心理学研究室卒業論文を基に、中澤潤、中道圭人が再分析・再検討したものである。

文 献

- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1982). Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 742-753.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1989). Children's reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, 28, 353-364.
- Fukuno, M., & Ohbuchi, K. (1998). How effective are

- different accounts of harm-doing in softening victims' reactions? A scenario investigation of the effects of severity, relationship, and culture. *Asian Journal of Social Psychology*, 1, 167-178.
- Gonzales, M. H., Pederson, J. H., Manning, D. J., & Wetter, D. W. (1990). Pardon my gaffe : Effects of sex, status, and consequence severity on accounts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 610-621.
- 熊谷智子 (1993). 研究対象としての謝罪—いくつかの切り口について—. 日本語学 明治書院, 12, 4-12.
- 松永あけみ (1993). 子ども (幼児) の世界の謝罪. 日本語学 明治書院, 12, 84-93.
- 中川美和 (2003). 対人葛藤場面における年長児の謝罪—許容スクリプト. 広島大学大学院教育学研究科紀要 (第三部), 52, 345-353.
- 中川美和・山崎 晃 (2004). 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連. 教育心理学研究, 52, 159-169.
- 中川美和・山崎 晃 (2005). 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響. 発達心理学研究, 16, 165-174.
- Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. (1989). Apology as aggression control : Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 219-227.
- Ohbuchi, K., & Sato, K. (1994). Children's reactions to mitigating accounts : Apologies, excuses, and intentionality of harm. *The Journal of Social Psychology*, 134, 5-17.
- Piaget, J. (1930). *Le Jugement moral chez l'enfant*. Geneve : Institut J.J. Rousseau. (大伴茂 (訳) 1954 児童道徳判断の発達 臨床児童心理学Ⅲ 東京：同文書院)
- Schlenker, B. R., & Darby, B. W. (1981). The use of apologies in social predicaments. *Social Psychology Quarterly*, 44, 271-278.
- Tavuchis, N. (1991). *Mea culpa : A sociology of apology and reconciliation*. Stanford, CA : Stanford University Press.